

# 日常会話における「～なくて」「～ないで」の談話機能

著者	下谷 麻記
雑誌名	関西外国語大学留学生別科日本語教育論集
巻	19
ページ	83-109
発行年	2009
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1443/00005866/">http://id.nii.ac.jp/1443/00005866/</a>

## 日常会話における「～なくて」「～ないで」の談話機能

下谷 麻記

### 要旨

本研究では、否定・打ち消しを表す「～ない」にみられる二種類のテ形「～なくて」と「～ないで」について、日常会話から得たデータを基に、それらの意味的また談話機能上の違いを探る。特に、会話におけるそれらの使用頻度、それらと共に起る表現の種類と談話環境、会話の流れ、そして、会話者間のインタラクションなどが「～なくて」と「～ないで」の使用にどのように関わっているかを考察し、それぞれの談話における意味・機能を明らかにする。

【キーワード】 ～なくて、～ないで、(無) 意志動詞、会話の流れ、談話機能、インタラクション、イントネーションユニット

### 1. はじめに

日本語における否定・打ち消しの形「～ない」は、動詞の場合、その「テ形」として「Verb なくて」と「Verb ないで」(以下、「～なくて」「～ないで」とする)という二種類の形を有する(以下、例(1)を参照)。

(1) PTA にはお母さんが行か { なくて / ないで }、お父さんが行った。

(McGloin 1972, 16(36))

この二種類の否定の「テ形」(two negative gerundive forms)については、これまでも比較的多くの研究が行われ、その形態的、統語的、意味的相違について様々な側面から考察がなされてきた(北川 1972; Kitagawa 1983; Kuno 1975; McGloin 1972, 1986, etc.)。その主な研究結果としては、形態的観点から、「～なくて」が「イ形容詞」の活用に由来するものであるとされるのに対し、「～ないで」が動詞性を帯びた「ない」

の否定形であるということ(北川 1976 ; Kitagawa 1983)<sup>(1)</sup>、また意味的観点から、「～なくて」が因果関係を、「～ないで」が付帯状況や対称的な関係を示すことが多いということが指摘されてきた(McGloin 1972, 1986 ; Kuno 1975, etc.)。このような研究結果は、日本語教育においてもしばしば取り入れられ、その違いの説明として、教科書(特に、中上級の教科書)等に同様の解説が施されることもある(土岐他 2008, etc.)。

確かに、過去の研究で明らかにされた「～なくて」と「～ないで」の違いは非常に興味深く、言語研究としてのみならず、日本語教育の現場においても大変有益な情報であると言える。しかしながら、過去の研究はそのほとんどが研究者の内省による作例に基づき、文レベルで分析されたものが多く、実際の日常会話において、どのようにこの二つの形が使用され、どのような談話構造のもとで、どのような談話機能を果たしているのかということについては未だ明らかにされていない部分が多い(cf. McGloin 1986 ; Yamada 2002)。

従って、本研究では、まず過去の研究で指摘されてきたことをまとめ、それらを基に日常会話で実際に使用された「～なくて」「～ないで」のケースを観察し、先行研究による指摘と一致する部分とそうでない部分について考察する。特に、この二つの形の使用頻度、共起する動詞の種類・文型、またそれらが使用される談話構造、そして会話参加者間のインタラクションとの関係に着目し、「～なくて」「～ないで」がそれぞれ、談話上、どのような機能・役割を果たしているのかを明らかにする。そして、最後に、それらの違いの解明が日本語教育の現場にどのように反映できるかということについて言及したい。

## 2. 先行研究と本研究の目的

### 2.1 先行研究

まず「～なくて」と「～ないで」の違いとして一般的によく認識されているのは、上でも述べたように、その形態的な相違と言える。以下の Kitagawa (1983) による例を参照されたい。

- (2) 赤ん坊が寝 { なくて / ないで } 母親が寝た。
- (3) 頭が痛く { なくて / \*ないで } 喉が痛い。
- (4) 僕はアメリカ人で { なくて / \*ないで } 日本人である。

Kitagawa (1983, 91-92 (3) (4), (5))

上の例(1), (2)が示すように、「～なくて」「～ないで」は共に動詞への接続は可能である。しかし、動詞以外（形容詞、コピュラ）への接続となると、例(3), (4)から分かるように、「～なくて」は可能であるが、「～ないで」が不可となる。しかしながら、動詞に接続する場合、「～なくて」と「～ないで」が全ての動詞に接続が可能かというところではない。そのため、過去の研究では、動詞に接続する場合に焦点を絞り、どのような場合にこの二つの形が共に接続可能で、どのような場合にどちらの形が接続不可となるか、またどちらも接続可能な場合、どのような相違が生じるかということについて、以下の四つのポイントを中心に、統語的、意味的、語用論的観点から考察が行われた（McGloin 1972, 1986；北川 1976, 1983；Kuno 1975）。

- ① 「Verb-neg-て」が補文構造（*te*-complement constructions）にあるかどうか
- ② 「S<sub>1</sub>-neg-て S<sub>2</sub>」という文における S<sub>1</sub> と S<sub>2</sub> の主語が同一であるかどうか
- ③ S<sub>1</sub> または S<sub>2</sub> 述部に現れる動詞の種類（意志性と状態性）：主に、意志動詞であるか、無意志動詞（または状態動詞）であるか
- ④ S<sub>1</sub> と S<sub>2</sub> の間にどのような意味的関係性（*semantic relationship*）が成り立つか、またどのような語用論的要因（*pragmatic factors*）が考えられるか

まず、①の点については、「Verb-neg-て」が補文となる場合、「～ないで」は使用可能であるが、「～なくて」は使用不可となる（McGloin 1972, etc.）。

(5) 太郎は、食べ { \*なくて / ないで }  $\left[ \begin{array}{l} \text{いる。} \\ \text{来た。} \\ \text{行った。} \\ \text{くれた。} \\ \text{あげた。} \\ \text{もらった。} \end{array} \right]^{(2)}$

(McGloin 1972, 13 (21))

例(5)から分かるように、「Verb-neg-て」が補文となる場合は当然、「V<sub>1</sub>-neg-て V<sub>2</sub>」の動作主は同一となる。これは、②の点に関連があり、「S<sub>1</sub>-Neg-て S<sub>2</sub>」という文にお

る  $S_1$  と  $S_2$  の主語（動作主）が同一である場合、上の例と同様に、「～ないで」は使用可能であるが、「～なくて」は使用不可となる。

(6) 多くの人が何の目的も持た { \*なくて / ないで } 留学する。

(7) 学校の後、うちへ帰ら { \*なくて / ないで }、映画を見に行った。

(McGloin 1972, 17 (40), (41))

しかし、 $S_1$  と  $S_2$  の主語が同一であっても、 $S_1$  または  $S_2$  の述部に状態動詞 (stative verbs)、または、無意志動詞 (non-self controllable verbs) を取る場合 (上記③) は、「～なくて」の使用が可能になる (または、その容認度が上がる)。以下の例を参照されたい。

(8) 太郎は英語ができなくて、しゅしゅ英語塾へ通った。 (McGloin 1972, 17 (43))

(9) (a) 彼は泳げなくて、川を (歩いて) 渡ったよ。

(b) \*彼は泳がなくて、川を (歩いて) 渡ったよ。

(c) 彼は泳がないで、川を (歩いて) 渡ったよ。

(Kitagawa 1976, 59 (9), (10))<sup>(3)</sup>

(10) (a) 彼はわざと返事しなくて、先生の叱責を受けた。

(b) \*彼は返事をしなくて、わざと先生の叱責を受けた。

(Kitagawa 1976, 65 (32), (33))<sup>(4)</sup>

例(8)と(9)(a)では、 $S_1$  の述部が、それぞれ「できる」「泳げる」という動詞の可能形、つまり、可能を表す状態動詞 (であり、無意志動詞と考えられるもの) で表されているため、「～なくて」の使用が可能になると思われる。<sup>(5)</sup> 一方、(9)(b)では、 $S_1$  の述部が「泳ぐ」という意志動詞で表されているため、「～なくて」を使った文が非文法的であると判断されるが、(9)(c)のように、「～ないで」を使用すると、より自然な文と解釈される。また、(10)(a)は、 $S_2$  の述部 (「先生の叱責を受けた」) が常識的には無意志動詞であると解釈できるため、「～なくて」の使用が可能となると考えられる (北川, 1976)。しかし、(10)(b)のように、「わざと先生の叱責を受けた」として意志動詞として認識されると、「～なくて」は使用できなくなってしまう。

以上のような事実から、北川 (1976) は、「～なくて」と「～ないで」の違いの決定

的な要因は、S<sub>1</sub>とS<sub>2</sub>の事柄の連鎖が同一主体のコントロール下にあると意識されているかどうかという点にあると指摘した。つまり、同一主体のコントロール下でない場合に「～なくて」が使用され、ある場合に「～ないで」が使用されると主張した。

しかしながら、S<sub>1</sub>またはS<sub>2</sub>の述部に状態動詞（または無意志動詞）を取らない場合でも、S<sub>1</sub>とS<sub>2</sub>の主語が異なっていれば、「～なくて」「～ないで」が共に使用可能となることも指摘されている（McGloin, 1972）。

(11) PTAにはお母さんが行か { なくて / ないで }、お父さんが行った。(= (1))

例(11)に見られるような「～なくて」と「～ないで」の相違については、上記④の点である「S<sub>1</sub>とS<sub>2</sub>の間の意味的關係性や語用論的要因」が大きく関わっているとみられる。特に、McGloin (1972) では、「～なくて」はS<sub>1</sub>とS<sub>2</sub>が因果関係 (causal relationship) にあることを示し、一方、「～ないで」は話し手の予想、期待に反してS<sub>1</sub>が起こらなかったこと (denial of expectation) を示唆すると述べられている。つまり、例(10)で「～なくて」が使われた場合は、「お母さんが行かなかったために、お父さんが行った」という原因結果を示す文と解釈され、「～ないで」が使われた場合は、「(話者が) お母さんが行くと予想、又は、期待していたところ、その予想、期待に反して、お父さんが行った」と解釈できる文となり、否定をより強く表明する文となると述べられている。

更に、McGloin (1986) では、S<sub>1</sub>の述部に無意志動詞を取る場合（つまり、「～なくて」が使用されやすく、「ないで」が使用されにくい環境）であっても、「～なくて」が使用できず、逆に「～ないで」のみ使用可能となる例が存在するということが指摘されており、「～なくて」と「～ないで」の違いが、無意志動詞 vs. 意志動詞という動詞の性質の差のみで議論できるものではないことが示されている。

(12) 英語が上手な竹山さんと一緒だったので、英語が下手なお父さんは  
あまり困ら { \*なくて / ないで } 旅行できた。

McGloin (1986,12)

「困る」という動詞は無意志動詞であると考えられる。しかし、例(12)では「～ないで」しか使用することができない。このような例を含め、McGloin (1986: 12) は、「S<sub>1</sub>

なくて／ないで S<sub>2</sub>」の違いについて、S<sub>1</sub>が S<sub>2</sub>に従属する（又は、S<sub>2</sub>に付帯する）度合いが大きいと話者に認識される場合ほど「～ないで」の使用がより自然となり、「～なくて」の使用が不自然となると主張している。逆に、S<sub>1</sub>と S<sub>2</sub>の間にそういった先験的な関係（an a priori relationship）がないと想定される場合には、「～なくて」の使用がより自然となり、因果関係を示す場合が多いということを指摘している。

## 2.2 本研究の目的

以上、2.1 では「～なくて」と「～ないで」の違いについて先行研究で明らかにされてきた内容を簡単にまとめた。これらの研究は、上でも述べたように、文レベルでの解釈とその使い分けという面で非常に興味深く、その貢献するところは大きい。しかし、談話レベルでこれらの否定形がどのような役割を果たしているかということについては触れられておらず、未開拓の部分が多い（cf. McGloin 1986 ; Yamada 2002）。実際、日常会話では、特に「～なくて」の使用に関しては、前後関係から「～なくて」とその後の発話の意味的關係が不明瞭である場合や、S<sub>2</sub>の部分自体が欠如していると思われるケースも多く、過去の研究で指摘されてきたことをそのまま当てはめて考えることのできないケースも見られる。以下の例(13)がその一例である。

(13) [Data 17] この会話では、K が通っていたニューヨークの高校とそこでの寮生活について話されている。直前の会話では、寮でルームメートが選べるかどうかという話をしている。

177. K: 最初の年は選べない。  
 178. Y: うんうんうんうん。  
 179. K: まー 僕の時は選べたんですけど:::,  
 180. Y: うんうん [うん。  
 181. → K: [今は選べなくて:::,  
 182. Y: うんうん [うんうんうん。  
 183. K: [で- 二年目からは[その:::選べるんです[よ。  
 184. Y: [うんうん [あ:::  
 185. そうなんだ=  
 185. K: =だから:::, ま:::一応知ってる人たちなんで:::, (つづく)

例(13)では、181 行目の K の発話（「今は選べなくて…;」）は、そのすぐ後に Y の相槌が入り、その後、談話標識（discourse markers）の一つでもある「で-」から始まる発話が続き、そのまま会話が続けられている（cf. Sadler 2006）。そのため、183 行目の K の発話を、181 行目の「S<sub>1</sub>なくて（S<sub>2</sub>）」の S<sub>2</sub>として解釈するのは困難であり、過去の研究からこのようなケースの「～なくて」の意味、機能を解釈することは難しい。

本研究では、このように実際の日常会話の中で使用された「～なくて」と「～ないで」のケースを分析することで、例(13)に見られたような、過去の研究結果からは判断し難いものについて考察を行う。特に、それらのケースが現れる談話構造や会話の進行状況、また会話の参加者間のインターアクションなどが、いかにこの二つの否定形のテ形の使用に影響しているか、またそこから分かる「～なくて」と「～ないで」の働きについて考え、談話における否定形の役割と「～なくて」「～ないで」の関係を明らかにしていく。そして、最後に、それらの違いが、日本語教育の現場でどのように扱われることが、日本語学習者にとってより分かりやすく、また日本語の会話力を身につけていく上で効果的であるかということについて提言する。

### 3. 会話データについて

本研究で扱った会話データは、インフォーマルな設定で行われた 25 セットの日常会話（Data 1-25）で、録音後、文字化したものである。文字化作業については、基本的に Jefferson（1989）による方法、規則、記号に従って行った。その詳細については付録に示した Transcription symbols を参照されたい。会話の参加者については、日本、または、アメリカの大学・大学院に通う日本語が母語の大学生・大学院生で、20 代から 40 代の男女計 37 名（延べ 55 名）である。会話の参加者数は一つの会話につき二名または三名で、それぞれの会話は 4.5 分から 37 分のセグメント（平均 13.5 分）で、総計時間は約 5.5 時間である。

日常会話では、会話の相手とのインターアクションをより円滑にしたり、発話を強調したりするために、プロソディが大きな役割を果たしていると言える（Couper-Kuhlen and Selting 1996; Ford and Couper-Kuhlen 2004）。「～なくて」「～ないで」の発話についても同様のことが言え、音声的に促音を伴って発話されたもの（「～なくって」）や、テ形の部分が長音化されたもの（「～なくて…;」「～ないで…;」）、また笑いを伴うもの（「～なく hh て huh huh」や「～ないで heh heh heh」など）がみられた。これらの発話は、全て「～なくて」「～ないで」のバリエーションとして考えら



れるため、本研究の考察対象として含めることにした。表1は、これらの会話データに現れた「～なくて」と「～ないで」の使用頻度を表すものである。

	～なくて	～ないで
使用頻度	71	16

表1:「～なくて」と「～ないで」の使用頻度

表1から分かるように、「～なくて」の使用は全体で71ケースだった。それに対し、「～ないで」は全体で16ケースと非常に少なく、使用頻度に大きな差が認められた。これは、「～ないで」が動詞にしか接続しないということも関係しているとみられるが、この「～ないで」の使用頻度の少なさについては、また4.2で改めて触れることにする。

まずは、表2の「～なくて」のデータを参照されたい。表2は、「～なくて」の使用について、「S<sub>1</sub>なくてS<sub>2</sub>」という形をもとに、S<sub>1</sub>の述部に共起する表現の種類を参考に分類し、まとめたものである。

S <sub>1</sub> の述部に現れる表現		使用頻度	使用例
名詞/ナ形容詞 + コピュラ (～じゃなくて)		22	日本じゃなくて::
イ形容詞 (～なくて)		9	考えてる暇がなくて::,
意志動詞 (未然形 + なくて)		10	書かなくて (いい)
無意志動詞	無意志動詞 (未然形 + なくて)	13	26 はじめ気がつかなくて 今は選べなくて::, 覚えてなくて::,
	可能動詞 + なくて (～られなくて)	8	
	状態/結果を表す「テイル」 (～て (い) なくて)	5	
文型の一部	「～たことがない」のテ形	1	カリフォルニア行った ことがなくて::,
	「～なきゃいけない」のテ形	2	警察署出向かなきゃい けなくて::,
	「～なくちゃいけない」のテ形	1	600円とか出さなくちゃ いけなくて,
合計		71	

表2:「～なくて」の使用とそのS<sub>1</sub>の述部に現れる表現

表2から分かるように、「～なくて」は、71例中22例が「名詞/ナ形容詞 + コピュラ

(～じゃなくて)」の形で現れたもの、9例が「イ形容詞(～なくて)」の形で現れたものであった。動詞に接続する形で現れたものについては、意志動詞の未然形に接続したケースが10例、無意志動詞(と考えられるもの)に接続したケースが合計で26例で、先行研究で指摘されてきたように、「～なくて」が無意志動詞と共起しやすいということが確認された。なお、無意志動詞に接続した「～なくて」については、意味的に元来無意志動詞であると考えられる動詞の未然形に接続したものが13例、可能動詞に接続したものが8例、そして、そして、状態・結果を表す「～テイル」の形に接続したものが5例であった。<sup>6)</sup> また、文型(または文法化した表現)の一部として現れる「ない」のテ形(「～たことがない」「～なきゃいけない」「～なくちゃいけない」)も3例みられた。

上述のように、コンピュータの否定形、イ形容詞の否定形(イ形容詞としての「ない」を含む)のテ形は、「～なくて」という形しかとらない。また、「～たことがない」「～なきゃいけない」「～なくちゃいけない」などの文型(または文法化した表現)の一部として現れる「ない」も、そのテ形には「～なくて」という形しか取らない。従って、「～ないで」との比較上、本研究では、動詞に接続する形で現れた「～なくて」の36ケース(表2に網掛けで示したもの)を分析対象とした。

次に、「～ないで」のデータについて述べる。表3は、「～ないで」の使用について、「S<sub>1</sub>ないでS<sub>2</sub>」という形をもとに、S<sub>1</sub>の述部に共起する表現の種類を参考に分類し、まとめたものである。

S <sub>1</sub> の述部に現れる表現		使用頻度	使用例
意志動詞(未然形 + ないで)		11	一言も話さないで帰った
無意志動詞	未然形 + ないで	2	5 (～に) なんも当たらないで:: (～に当たるって言うとき) 段取りできてないで来てって言うとき:: (困る)
	状態/結果を表す「テイル」(～てないで)	2	
	受身形(～られないで)	1	
合計		16	

表3: 「～ないで」の使用とそのS<sub>1</sub>の述部に現れる表現

表3から分かるように、「～ないで」は意志動詞の未然形に接続したものが11例、無意志動詞に接続したものが5例で、先行研究でも指摘されたように、「～ないで」の

使用は S<sub>1</sub> の述部には意志動詞を取る場合が多かった。

以下では、これらケースをさらに、「S<sub>1</sub>-Neg て S<sub>2</sub>」の述部に現れる表現の種類、S<sub>1</sub> と S<sub>2</sub> の主語の異同等とどのように関連しているか、先行研究で指摘されてきた内容と実際の会話でみられる使用とを比較しつつ、さらに分析、考察していきたい。

#### 4. 談話における否定形の役割と「～なくて」「～ないで」の関係

##### 4.1 「～なくて」

##### 4.1.1 会話にみられる「～なくて」の特徴

前節では、動詞に接続する形で現れた「～なくて」が合計で 36 ケース存在したことを表 2 で示した。本節では、その 36 ケースに焦点を当てて考察する。まず、表 4 を参照されたい。表 4 は、「S<sub>1</sub>なくて (S<sub>2</sub>)」という発話における S<sub>2</sub> の述部表現とその使用頻度をまとめたものである。

S <sub>2</sub> の述部に現れる表現	使用頻度	使用例
形容詞、状態動詞、無意志動詞を含む表現	15	例(14)
意志動詞を含む表現	5	例(15)
S <sub>2</sub> の発話自体が不明、または不明瞭	16	例(16), (17)
合計	36	

表 4: 「～なくて」の使用とその S<sub>2</sub> の述部に現れる表現

表 4 から分かるように、「～なくて」の使用については、S<sub>2</sub> の述部においても、形容詞や状態動詞、無意志動詞などを含む表現が現れたケースが 15 例と多くみられたが、それに対して、意志動詞を含む表現が現れたケースは 5 例と比較的少ないことが分かった。また、意志動詞を含む表現が S<sub>2</sub> の述部に現れた 5 例については、全て S<sub>1</sub> と S<sub>2</sub> の主語が異なっているケースであることも分かった。これらの点については、先行研究において指摘されてきたことと一致する内容であり、S<sub>1</sub> と S<sub>2</sub> の間の意味的關係についても、因果関係が確認できるものがほとんどであった。以下の例(14), (15)を参照されたい。

##### (14) S<sub>2</sub> の述部に無意志動詞を含むケース

[Data 7] D と E はクラスメートで、彼らが取っているクラスについて話している。前の文脈 (99-149 行目) では、別のクラスメートについて D が話している。



には意志動詞の「教える」の過去進行形「教えてた」が使用されている。また、ここでの  $S_1$  と  $S_2$  の関係については、「K 先生がいなかったために、H 先生が（代わりに）教えていた」と解釈することができ、因果関係にあるのが分かる。

しかしながら、表 4 に示したように、実際の会話では、例(14)や(15)のように、 $S_2$  が必ずしも明瞭ではなく、 $S_2$  の発話そのものが不明（または不明瞭）であるものが 16 ケースみられた。このようなケースは、当然、先行研究で指摘されてきた「 $S_1$  なくて  $S_2$ 」という形で現れていないため、「 $S_1$  なくて  $S_2$ 」の意味的關係がはっきりしない。例(16), (17)を参照されたい。

#### (16) $S_2$ の述部が不明のケース

[Data 6] この会話の前の文脈で、C と K は小学校時代の話をしている。その話の延長で、C が最近合コンで 7 年ぶりに小学校の同級生に会ったという話をはじめ。

126. C: だってね? .hhhhh 小学校の時塾一緒だった人がいたの。  
127. K: °え-° マジで?  
128. C: 7年ぶりの再会で::, .hhhh はじめ気がつか<sup>なくて::,</sup>  
129. 自己紹介してる時に::,  
130. なんか- 理工学部 2年NJ ですとか言い出して。  
131. (0.2) ↑え! とか言って,  
132. え- N- どっかで聞いたことあるな- みたいな-  
133. あ:: とか言ったら, あ:: とか言って::: (つづく)

例(16)の 128 行目にみられる C の発話「(小学校時代の同級生に) はじめ気がつかなくて::,」は、その後に「自己紹介してる時に::,」と話が続いているが、「～なくて」との意味的關係として考えると、因果関係も並立関係も成立するとは解釈しづらく、そこに  $S_2$  に相当する発話を見いだすことができない。

#### (17) $S_2$ の述部が不明のケース

[Data 3] T と S は家族について話している。152 行目までは、S が彼女の祖母について話し、153 行目で T が彼女の祖母について話し始める。

153. T: うちのばあちゃん°も° 転んだん [だよね::,  
154. S: [う:ん

155. T: =この前(0.8)=つてか(.)うち(.)
155. ばあちゃん(0.2)転んだことがきっかけで::,
156. あっこれはボケが進んでるっていうのが判明したんだ[けど:::,
157. S: [あh そうなの?
158. T: =なんかね:: (0.3) ころんだんだんだけど::,
159. (1.4)
160. S<sub>1</sub>→ T: それはもうどこで転んだかも覚えて $\boxed{\text{なくて::}}$
161. (0.7)
162. T: で- なんか:(0.6)すごく痛がる(.)から:::,
162. S: [うんうんうん
163. (1.0)
164. T: 一日だけだっ°たけど°病院に入院したの°ね° (つづく)

例(17)の 160 行目にみられる T の発話も、「～なくて」の発話の後に、0.7 秒のポーズがあり、すぐに「で-なんか:(0.6)すごく痛がる(.)から::,」と、話の続きに移っているため、例(16)同様、前後の文脈から「～なくて」の後に続き得る S<sub>2</sub> の内容が推測しづらく、「～なくて」との意味的關係も不明瞭であると言える。これは、2.2 で示した例(13)についても同様のことが言えるが、このように、S<sub>2</sub> の部分を欠く「～なくて」の使用は、実際、動詞に接続する場合だけでなく、名詞／ナ形容詞の否定・テ形（～じゃなくて）やイ形容詞の否定・テ形（～くなくて）についても多く見うけられ、会話にみられる「～なくて」の使用の大きな特徴とすることができる。

以下では、上で示した S<sub>2</sub> の部分が明確な「～なくて」とそうでない「～なくて」の使用について、現れる談話のタイプ、談話構造、会話者間のインターアクションとの関連性を基に、「～なくて」の談話上の役割を考察していく。

#### 4.1.2 会話の流れにおける展開・発展・終結と「～なくて」の役割

まず、S<sub>2</sub> の部分が明確な「～なくて」とそうでない「～なくて」の現れる環境として分かったことは、後者の（S<sub>2</sub> の部分を欠く）「～なくて」の使用が、特に、以下のようなタイプの談話の中で多くみられるということである。

- (i) 体験談を中心とするナラティブ談話の中 (narrative discourse)
- (ii) 話題に持続性があり、膨らみをもつ会話の流れの中 (extended topical sequences)

前者の (S<sub>2</sub>の部分が明確な)「～なくて」については、この(i), (ii)のようなタイプの談話に限らず、その他の談話 (話題に持続性のないタイプの談話) にもみられた。

このような否定表現の使用と(i), (ii)のような談話との関連については、McGloin (1986) や Yamada (2002) の研究においても、語用論的観点から考察が行われており、特に、McGloin (1986) では、Labov (1972) で提示されたナラティブ談話における六つの構成要素 (①Abstract、②Orientation、③Complicating action、④Evaluation、⑤Result or resolution、⑥Coda) のうち、④の Evaluation として否定表現が効果的に使用されることが指摘されている。また、Yamada (2002, 65) においても、否定表現が談話の中で果たす機能として、次の四つの点が挙げられている：(a) Problem-indicating function, (b) The function of marking a turning point in the storyline of a narrative, (c) The function of creating a high tension point in a narrative, (d) The function of making moral evaluation.

「～なくて」の使用についても、これらの研究で指摘されたことが当てはまると言えるが、ここで注目すべきであるのが、「S<sub>1</sub>なくて S<sub>2</sub>」と「S<sub>1</sub>なくて、(S<sub>2</sub>欠如)」の現れる会話の流れ (conversational sequences) とその位置 (sequential positions)、そしてその後の会話の展開の仕方である。まず、S<sub>2</sub>が明確に現れている「S<sub>1</sub>なくて S<sub>2</sub>」のケースは、上の(i), (ii)に挙げた話題に持続性のある談話環境に限らず、話者の評価 (Evaluation) や見解、その話題のポイントや鍵を握る発話を表し、結果的に、「S<sub>1</sub>なくて S<sub>2</sub>」の後、その話題を終結に導く役割を果たしているものが多いことが分かった。一方、S<sub>2</sub>が不明 (または不明瞭) である「S<sub>1</sub>なくて、(S<sub>2</sub>欠如)」のケースは、(i), (ii)に挙げた話題に持続性のある談話環境において、問題を提起したり、話の流れに方向付けを行ったりすることで話題を展開、発展させていく役割を果たしているものが多いということが分かった。では、S<sub>2</sub>を伴う「S<sub>1</sub>なくて S<sub>2</sub>」の例と、S<sub>2</sub>を伴わない「S<sub>1</sub>なくて、」の例を再度詳しくみてみよう。まずは、前者の例をもう一度参照されたい。

(18) (=14) [Data 7] D と E はクラスメートで、彼らが取っているクラスについて話している。前の文脈 (99-149 行目) では、別のクラスメートについて D が話している。

150. D: 昨日飲んだとか言ってて:::,

151. E: イケイケだな:,

152. D: ね: (0.3) それで遅れて:::,

153. E: うん.





13. Y: ↑あ:::ん, なんかインタビューを(.)ね::, 学生に::,  
 14. R: あ:::そうです[そうです.  
 15. Y: [してもらって[とかいう感じ=  
 16. R: [は:::い.  
 17. Y: =↑なん- なんのトピックだったっけあれ. (つづく→ 話題の転換)

例(19)では、10行目のRの「S<sub>1</sub>なくてS<sub>2</sub>」発話（「あの >K先生がいなくて< あのH先生が教えてた°時°」）が、7行目でYが思い出した内容（「あの:H君が教えた時に:::,」）を再確認する形となるため、その後は、前回YとRが会った時の状況についての話題は終結に向かう（11-12行目）。そして、その後、その話の延長として、当時日本語のクラスで行っていたインタビューの内容へと話題が移り、会話が継続されているのが分かる（13-17行目）。

以上の例から分かるように、「S<sub>1</sub>なくて S<sub>2</sub>」のパターンで現れる「～なくて」は、「S<sub>1</sub>なくて」の部分で話題の重要なポイントを示し、S<sub>2</sub>の部分で、話し手の評価、見解、確認を示す発話を示す場合が多い。そのため、その後の流れとして、それに対する聞き手の評価、理解、確認、相槌などを促し、話し手は、それを受けてさらに評価、相槌などを繰り返すというパターンの会話の流れを作る傾向にある。Goodwin (1986) や Iwasaki (1993) などでも指摘されているように、会話の流れの中で、評価、理解、相槌などが連鎖する場合、その話題が終結に向かうということが多くみられる。<sup>7)</sup> 従って、その後、会話を継続させるために、話題の転換が起こる (Maynard 1980)。つまり、S<sub>2</sub>を伴う「～なくて」の発話も、このようにして聞き手の評価、理解、確認、相槌などを促し、結果的に話題の流れを終結へと導く役割を果たしていると言える。

これに対して、S<sub>2</sub>が不明（または不明瞭）であるケースは、以上のような会話の流れが終結に向かう談話環境にはみられない。典型的には、上述のように、ナラティブ談話をはじめとする話題に持続性のある会話の中でのみ見られ、その会話の流れがさらに発展、展開を見せる場面で使用される。つまり、Labov (1972) で指摘されているナラティブ談話の③Complicating action の一部として現れる傾向にある。以下の例をもう一度参照されたい。

(20) (= 16) [Data 6] (会話の前置きについては、例(16)を参照)

113-125: ((① Abstract & ② Orientation))

126. C: だってね? .hhhhh 小学校の時塾一緒だった人がいたの.
127. K: °え-°マジで?
128. → C: 7年ぶりの再会で::, .hhhh はじめ気がつかなくて::,
129. 自己紹介してる時に::,
130. なんか- 理工学部2年NJ ですとか言い出して. ③ Complicating action
131. (0.2) ↑え!とか言って,
132. え- N- どっかで聞いたことあるな- みたいな-
133. あ:: とか言ったら, あ:: とか言って::: (つづく)

例(20)が示すように、113-125 行目では、C の体験談の概要 (①Abstract) とその話の背景・状況 (②Orientation) として、何が、どこで、いつ、どのようにして行われることになり、誰がそこにいたかという大まかな内容が述べられている。そして、その後、126 行目で、C の予想していなかったハプニング (③Complicating action) があったことが述べられている。K (聞き手) の驚きを示す反応を受け (127 行目)、C は更にその後も続けて話を展開させるが (128-133 行目)、S<sub>2</sub> を欠く「～なくて」の発話(「はじめ気がつかなくて::,」) は、その長いターンのはじめの部分で使用されている。つまり、S<sub>2</sub> を欠く「～なくて」は、その話を山場へと導くきっかけとして使用され、その後の話の展開を投射する役割を果たしていると言える。これは、C の「～なくて」の発話の後の 129 行目で、聞き手である K がターンを取ろうとしていないことから、その後の展開が推測、期待されていることが分かる。次の例(21)についても同様の状況が伺える。

(21) (= 17) [Data 3] (会話の前置きと 153-157 行目については、例(17)を参照)

- 153-157: ((① Abstract & ② Orientation))
158. T: =なんかね:: (0.3) ころんだんだだけど::,
159. (1.4) ③ Complicating action
160. S<sub>1</sub>→ T: それはもうどこで転んだかも覚えてなくて::,
161. (0.7)
162. T: で- なんか: (0.6) すごく痛がる(.)から::,
162. S: [うんうんうん
163. (1.0)

164. T: 一日だけだっ°たけど°病院に入院したの°ね° (つづく)

例(21)では、まず 153-157 行目で T の祖母の病状についての概要と背景 (①Abstract, ②Orientation) が述べられ、その後、158-160 行目で話の展開が始まる (③ Complicating action)。内容が深刻なため、T はポーズを伴いつつ躊躇いがちに、祖母についての状況を説明するが、160 行目の T の「～なくて」の発話の後、聞き手の S はターンを取らず、T の話の続きを待っているように伺える。そのため、161 行目では 0.7 秒の沈黙が流れ、T は次のターンで話をさらに展開させ始める。

これらの例に見られるように、S<sub>2</sub>を欠く「～なくて」は、継続調のトーン (continuing tone [,]) を伴うことが多く、話し手が話そうとしている内容そのものがまだ終わっていないことを示すため、その後、聞き手がターンをとって話し手に取って変わるような話者交代は起こらない (Ford and Thompson 1996)。従って、聞き手の反応としても、頷きを含む相槌、いわゆる continuer (Schegloff 1982) と呼ばれるタイプの最小限の発話 (または nonverbal reaction) が多く、話し手の発話を促す姿勢を見せる。これらの事実も、やはり、S<sub>2</sub>を欠く「～なくて」の発話が話題のさらなる展開を投射する役割を果たし、それと同時に、その話を山場へと導くきっかけを示しているということを証明していると言える。

以上に述べてきたように、自然会話における「～なくて」の使用は、「S<sub>1</sub>なくて S<sub>2</sub>」における S<sub>2</sub>の部分に伴うかどうかで、会話の流れの中で使用される位置が異なり、また、それによって談話上の機能、役割、そして会話者間のインタラクションに与える影響も大きく異なるということが分かった。

## 4.2 「～ないで」

### 4.2.1 会話にみられる「～ないで」の特徴

次に、会話にみられる「～ないで」の特徴について述べる。前節では、「S<sub>1</sub>なくて S<sub>2</sub>」の使用について、S<sub>2</sub>を欠くケースが比較的多いことについて述べたが、「～ないで」の使用においては、そのようなケースは (S<sub>2</sub>の省略が明らかなケース二例を除いて) 見られなかった。これは、先行研究でも指摘されてきたように、「～ないで」が補文構造として一つの文に埋め込まれやすいこと、また「S<sub>1</sub>ないで S<sub>2</sub>」における主語が同一である場合に使用されることが多いことも影響していると思われる。実際、本研究で扱ったデータにみられた「～ないで」についても、S<sub>1</sub>と S<sub>2</sub>の主語が同一である

ことが明確なケースが 16 例中 15 例で、異なるケースについては（省略が多く曖昧ではあるが）文脈上、異なると思われるものが 1 例みられたただけであった。

また、 $S_1$  と  $S_2$  の主語が同一であった 15 例については、そのうちの 10 例が補文（「～しないで（ください）」「～しないでほしい」「～しないでいい」「～しないで来た」「～しないで帰った」）として使用されたもので、その全てが一続きのイントネーションユニット（one intonation unit, Chafe 1992; Iwasaki 1993）で発話されたものであった。実際、「～しないで」が補文として現れていない例についても同様の傾向がみられるものがあり、この点が会話に現れる「～なくて」と「～しないで」の発話に見られる大きな違いの一つでもあった。つまり、「～なくて」は、「 $S_1$ -neg て  $S_2$ 」における「～て」の部分で継続のトーンを伴い、 $S_2$  が別のイントネーションユニットで発話される（または、 $S_2$  を伴わず、話しを続ける）傾向にあるが、「～しないで」は、そういった傾向が見られるケースの方が少なく、「 $S_1$ -neg て  $S_2$ 」における  $S_1$  と  $S_2$  の結びつきが「～なくて」に比べて強いということが言える。この事実は、McGloin (1986) が指摘する『「 $S_1$  しないで」がそれに続く  $S_2$  に従属する関係をより強く示す』という点に一致していると言える。以下の表 5 は、「 $S_1$  なくて  $S_2$ 」と「 $S_1$  しないで  $S_2$ 」における  $S_2$  が一つのイントネーションユニットで発話されたケースとそうでないケースの使用頻度を表したものである。

「 $S_1$ -neg て」と「 $S_2$ 」のイントネーションユニット		使用頻度	使用例
～なくて	一つのイントネーションユニット	11	例(15)
	別のイントネーションユニット	25	例(13), (14), (16), (17)
～しないで	一つのイントネーションユニット	11	例(22)
	別のイントネーションユニット	4	例(23)

表 5： 「～しないで」の使用とそのイントネーションユニット

以下では、「～しないで」がその後の発話と一つのイントネーションユニットで発話されているかどうかという点をもとに、「 $S_1$  しないで  $S_2$ 」における  $S_1$  と  $S_2$  の関係性を考察し、「～しないで」が談話上どのような働きをしているかについて述べる。

#### 4.2.2 先行・優先されるべき事柄の欠如・逆転と「～しないで」の談話機能

まず、以下の例(22)を参照されたい。この例は、「 $S_1$  しないで  $S_2$ 」における  $S_2$  が一つのイントネーションユニットで発話されたケースの一例である。

(22) [Data 6] C が合コンで7年ぶりに小学校の同級生に会ったという話をしている(例16の話のつづき)。

140. C: あ::で- なんかお互い気まずく [て::,  
141. K: [ah huh huh huh  
142. → C: それからお互い一言も話さないで[帰った.  
143. K: [.hhhh .hhh ah huh huh huh .hhhh  
144. C: .hhhh あ::ただ合コンで再会ってどうよ, とか[思って::,  
145. K: [ね:::  
146. K: どっかで会ったよね=  
147. C: =Ah huh [huh  
148. K: [あ::::: みたいな.  
149. C: なんか小学校ん時塾一緒だったよね::みたいな.  
150. K: あ:::  
151. C: huh huh huh

例(22)の C の発話(142行目)「それからお互い一言も話さないで帰った。」は、「話さないで」が「帰った」の補文として使用されているケースで、一つのイントネーションユニットで発話されているのが分かる。

「～ないで」は、上述の McGloin (1972, 1986) の指摘にもあるように、『「S<sub>1</sub>ないで」がそれに続く S<sub>2</sub>に従属する関係をより強く示す』場合に使用される傾向にある。この傾向は、特に、時間的に先行すべき(または先行すると推測される)事柄(S<sub>1</sub>)が欠如した状態で、後続すべき(または後続すると推測される)事柄(S<sub>2</sub>)が起こった場合にみられるようである(cf. McGloin 1986)。つまり、例(22)においても、“合コン”という“話す”ことを目的として集まる場では、一般的には「話してから帰る」ということが時間の流れとしては当然(または自然)だと推測されるが、それをしないで帰ったということが述べられており、ここではそういった推測、期待されることに反する内容が話のオチとして示された形となっている。このように、日常会話で見られる「～ないで」の発話には、「一般的・常識的に(または会話の流れから)推測されることに反する出来事が起こった」ということに対する話し手の視点、評価、態度などを表す発話として使用されることが多い(McGloin 1972)。従って、例(22)のようなナラティブ談話においては特に、「～ないで」はその話の重要なポイントが示される

場面で使用されることが多く (Yamada 2002)、その発話が、話の流れを終結へと導く傾向にあるということが言える。これは、「S<sub>1</sub>なくて S<sub>2</sub>」における S<sub>2</sub>を伴うケースの談話機能とも類似しており、実際、例(22)をみても、142 行目の「一言も話さないで帰った」の後、話が終結に向かっているのが分かる。

次に、「S<sub>1</sub>ないで S<sub>2</sub>」における S<sub>2</sub>が別イントネーションユニットで発話されたケースについて述べる。例(23)を参照されたい。

(23) [Data 22] MとYは日本語弁論大会の運営に携わっている日本語の Teaching Assistant で、日本語のクラスの学生が大会に参加した際にもらえることになっている extra credit の基準 (どの程度参加すれば extra credit に相当するか) について話している。この前の文脈では、①実際に大会に応募し、選考に残って発表した学生、②応募はしたが選考には漏れてしまい発表はしなかった学生、そして、③応募はしていないが弁論大会のオーディエンスとして参加した学生の参加度について議論されている。

447. S<sub>1</sub>→ M: でき:: その- 選考もれした人に::,

448. Y: う::ん.

449. S<sub>1</sub>→ M: なんも当たん ないで::,

450. S<sub>2</sub>→ オーディエンスとして行った人に当たるって言うとき::,

451. また [それも

452. Y: [そうだね.

453. M: 不公平だよね::

Transcription から分かるように、この例の「～ないで」は、S<sub>1</sub>に相当する部分 (447, 449 行目) と S<sub>2</sub>に相当する部分 (450 行目) が別のイントネーションユニットで発話されているのが分かる。この例は、上で示した例と比較すると、発話の音声的な単位が異なるだけでなく、意味的にも、S<sub>1</sub>で表される事柄が S<sub>2</sub>で表される事柄に従属する (または付帯する) 関係を示していると解釈するのが難しい。つまり、「(弁論大会に応募し) 選考もれした学生に (Extra credit が) 当たる」ということ (S<sub>1</sub>) と「オーディエンスとして (大会に) 行った学生に (Extra credit が) 当たる」ということ (S<sub>2</sub>) の間には、はっきりとした時間的主従関係はみられない。

しかし、このような例については (例が少ないものの、その全てが) S<sub>1</sub> と S<sub>2</sub> が選択

肢として考慮された場合の優先順位に関係しており、話し手の中の心理的優先順位が反映されていると考えられるものであった (McGloin 1986)。つまり、例(23)では、ただ弁論大会を聞きに行っただけの学生より、応募はしたが選考に漏れてしまった学生の方が、応募するまでの労力を考えると、Extra credit を与えるに値するのではないかという話し手 (M) の心理的優先順位が反映されていると考えられ、その順位が逆転してしまうとなると、「不公平だ」(435 行目) と述べている。

以上に述べてきたように、本節では、日常会話における「～ないで」について、「S<sub>1</sub>ないで S<sub>2</sub>」における S<sub>1</sub> と S<sub>2</sub> の意味的関係性が、その発話のイントネーションユニットに影響していることを指摘した。特に、「S<sub>1</sub>ないで S<sub>2</sub>」が一つのイントネーションユニットで発話される場合は、時間的な先行順位が関係している場合が多く、S<sub>2</sub> が「S<sub>1</sub>ないで」と別のイントネーションユニットで発話されている場合は、選択肢としての話し手の心理的優先順位が関連している可能性が高いことを述べた。このように「～ないで」は、何らかの先行・優先順位において先行・優先されるべきものが欠如していたり、逆転していたりする (可能性がある) 場合に使用されるため、話し手の期待 (または、会話者間で期待されるもの、一般的、常識的に期待されるもの等) に反しているということを強く前景化する働きがあると言える。日常会話の中で、S<sub>2</sub> を伴わずに「S<sub>1</sub>ないで」のみの状態で現れる場合が少ないのは、やはり対話者を目前にしてそういった話し手の期待との不一致や強いコントラストを示唆することが、相手の面子を脅かす発話 (face-threatening acts, Brown and Levinson 1987) になりかねないからではないかと考えられる。

## 5. 研究結果のまとめ

本研究では、日常会話にみられる「～なくて」と「～ないで」の使用について、その使用頻度と使用される談話環境、会話の流れ、そして会話者間のインタラクションを基に考察してきた。

「～なくて」については、特に、「S<sub>1</sub>なくて S<sub>2</sub>」における S<sub>2</sub> の発話が欠如しているものが会話には多く見られる事を指摘し、それらのケースがナラティブ談話をはじめとする話題に持続性のある談話に多く見られることを明らかにした。そして、その中で「～なくて」は、継続調のトーンを伴い、話し手の話が継続中であることを示すと同時に、その話を山場へと導くきっかけを作り、話題のさらなる展開・発展を投射する、インタラクション上、非常に重要な働きをしているということを述べた。

一方、「～ないで」については、「S<sub>1</sub>ないで S<sub>2</sub>」における S<sub>2</sub>の発話を欠くものがみられず、その多くが「S<sub>1</sub>ないで S<sub>2</sub>」を一つのイントネーションユニットとして発話されたものであることを指摘した。そのため、「～ないで」は、それだけで継続調のトーンを伴って発話されることが少なく、「～なくて」が示したような話題の展開・発展を投射する役割は「～ないで」にはみられなかった。「～ないで」の使用は、元来、S<sub>1</sub>と S<sub>2</sub>の関係として、何らかの時間的先行順位、又は、ある選択肢における話し手の心理的優先順位が大きく影響しており、先行・優先されるべきものが欠如、または逆転している（可能性がある）こと示す働きを持っている。そのため、話し手の推測・期待にそぐわないことを示唆する場合に使用されることが多い。このような働きを持つ「～ないで」は、談話の中では局所的な文脈で現れるケースが多いが、ナラティブなどの談話で現れる場合は、その話の最も重要な部分（オチ）を表すのに使用されることも多く、ストーリーの構成として効果的な役割を果たすと言える。

## 6. 日本語教育現場への提言

「～なくて」と「～ないで」は、日本語教育の現場においては、それぞれの使われる文型、または活用の一部として個別に教えられ、それぞれの文脈で別々に練習されるのが一般的であると思われる。そのため、この二つの否定のテ形の意味的違いについて、特に取り立てて説明したり、練習したりする機会はあまりないだろう。もちろん、筆者自身も、日本語を教える立場としては、学習者を混乱させる可能性のあるものを、わざわざ取り立てて文法説明や練習を行うことがどれだけ効果的かということについては疑問を感じる部分がある。しかし、今回の研究で明らかにされた「～なくて」と「～ないで」の意味的相違、また談話機能としての違いについては、個別にこれらを教える際の文法説明、また会話練習にも役立てることができるのではないかと考える。

例えば、「～なくて」に関しては、ナラティブの練習をさせる際などに、「～なくて」の談話機能、つまり、継続調のトーンを伴って発話することで話の展開・発展を示すことや、話を山場へと導く際の言い回しとして頻繁に使用されることなどを伝えることで、ナラティブにおける日本語での自然な言い回しに気づかせてあげることができるのではないかと考える。これは、筆者が常々感じていることだが、中級レベル以上の学習者であっても、体験談などを話させると、文法的に間違っていないのにも関わらず、会話として不自然さを感じる言い回しや言葉のつながりがみられることがある。



逆に、そういった言い回しや言葉のつながりが巧く使いこなせている学習者ほど会話力のレベルの高さを感じる。「S<sub>1</sub>なくて S<sub>2</sub>」の S<sub>2</sub>を欠くタイプの「～なくて」などは、そういった会話のつながりとして非常に効果的に使用されている言い回しの一つなのではないかと思う。もちろん、このタイプの「～なくて」を使えるようにするための練習を取り立ててするというのは難しいかもしれない。しかし、教師がそういった言い回しの存在を認識することで、教室の中で不自然な言い回しがあった場合に、フィードバックとして自然な言い回しを示してあげるなど、ミクロなレベルで学習者の会話力向上に貢献することができるのではないかと思う。

「～ないで」に関しては、初級の後半で英語の“without ~ing”という意味として導入されるのが一般的である。例えば、「急いでいたから、傘を持たないで、来ちゃったんです」(坂野他 2008, 154)。中級レベルの教科書になると、英語で“instead of ~ing”という意味に訳されるタイプの「～ないで」として、「図書館へ行かないで家で勉強する学生もいる」(Miura and McGloin 2003, 37) などのような例も導入される。これらの「～ないで」は、一般的に、初級で導入される場合も、中級で導入される場合も、意味的には英訳に頼ることが多いために、特に、中級で“instead of ~ing”の「～ないで」が導入された際に、いつ “instead of ~ing”の意味になり、いつ “without ~ing”の意味になるかということが学習者の疑問の種となる場合もある。しかし、日本語教師にとっても、その違いを簡潔に説明するのは非常に難しいと言える。

本研究で明らかにした「～ないで」の使用とその意味・機能は、そういった場合に、英訳による説明の補足として、日本語教師が役立てていける内容ではないかと思う。実際、先行研究をもとに本研究で示した「時間的先行順位」に関係する「～ないで」の使用は“without ~ing”の意味として使われる「～ないで」に一致し、「選択肢における話し手の心理的優先順位」を表す「～ないで」の使用は、“instead of ~ing”の意味として使用される「～ないで」に一致する。例文を作る際、日本語教師自身が母語話者の直感で、無意識のうちにこれらを混同してしまい、学習者を混乱させないためにも、教える側がこの違いを認識しておくことは大切なのではないかと考える。また、前者の「～ないで」が、実際の会話では、一つのイントネーションユニットで発話されやすいことについても、発話練習の際により自然で、スムーズな発話を心がけるという意味で、実際の会話での発話パターンが理解されていることは大切なことではないかと考える。

以上、「～なくて」と「～ないで」の談話上の役割を中心に、その意味的、機能的

相違について考察し、それをもとに日本語教育現場への提言を行った。データが不十分であったことも否めないが、「～なくて」と「～ないで」の意味上、また談話上の機能に対する理解が深まり、少しでも日本語教育の現場に反映、貢献できる内容が提供できていれば幸いに思う。

## 注

- (1) 北川(1976: 66)では、このような動詞性を強く帯びた「ない」については、助動詞の「ない」と言ってよいと述べられている。
- (2) 例文の若干の修正は筆者によるものである。
- (3), (4) 例(9)(10)の(a), (b)における「～なくて」の文法性(容認度)の判断は北川(1976)によるものである。ただし、例(9)の( )内の「歩いて」は、文の意味を把握しやすくするために筆者が加筆修正したものである。また、(9)の(c)は「～なくて」と「～ないで」を比較するために筆者が加えたものである。
- (5) 動詞の分類基準、また文法性の判断基準の一つとして、意志性(self-controllability)の概念が重要視されていることについては、Kuno(1973)を参照されたい。
- (6) 本研究でも、意志動詞、無意志動詞の分類に触れる際は、脚注(5)で述べた Kuno(1973)を参考にした。
- (7) Iwasaki (1997)では、会話の流れの中で起こるポーズや相槌の連鎖を“Loop sequence”と呼び、そのような状況下では話題の転換が起こりやすいということを指摘している。また、Goodwin (1986)では、会話の流れが終結に向かう部分(sequence closing positions)では、相手の発話に対する評価(assessment)を示す発話が頻繁に見られるということが述べられている。

## Transcription symbols

- (.) マイクロポーズ、沈黙の長さ
- hhh. 吐く息
- .hhh 吸う息
- あ- 発話が途中で切れていることを示す
- = 次のターンへとよどみなく繋がっていること(または急いで次に移る発話)を示す
- [ 重複する発話の始まり
- あ::: 引き延ばされた発話
- °° 周囲の発話より小さく発話されていることを示す
- ↑↓ 矢印のすぐ後の発話が急に高い(または低い)ピッチで発話されたことを示す
- . 下降調のイントネーション
- , 継続調のイントネーション
- ? 上昇調のイントネーション
- >< 発話のテンポが速くなっていることを示す
- <> 発話のテンポが遅くなっていることを示す

## 参考文献

- Brown, G. and S. Levinson. (1987) *Politeness. Some Universals of Language Usage*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Chafe, W. L. (1992). The Flow of Ideas in a Sample of Written Language. In S. A. Thompson and W. C. Mann (eds.), *Discourse Description: Diverse Linguistic Analyses of a Fund-raising Text*, (pp. 267-294). Philadelphia, PA: John Benjamins Publishing Company.
- Couper-Kuhlen, E. and C. E. Ford. (2004) *Sound Patterns in Interaction. Typological Studies in Language 62*. Philadelphia, PA: John Benjamins Publishing Company.
- Couper-Kuhlen, E. and M. Selting. (1996) *Prosody and Conversation*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Ford, C. and S. A. Thompson. (1996) Interactional units in conversation: syntactic, intonational and pragmatic resources for the management of turns. In E. Ochs, E. A. Shcglloff and S. A. Thompson (eds.), *Interaction and Grammar*. (pp. 134-184). Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Goodwin, C. (1986) Between and within: Alternative sequential treatment of continuers and assessments. *Human Studies* 9, 205-217.
- Iwasaki, S. (1993) The Structure of the Intonation Unit in Japanese. In S. Choi (ed), *Japanese/Korean Linguistics* 3, 39-53, Stanford, CA: CSLI.
- Jefferson, G. (1989) Preliminary notes on a possible metric which provides for a “standard maximum” silence of approximately one second in conversation. In D. Roger, P. Bull, (eds) *Conversation: an interdisciplinary perspective* (pp166-196). Clevedon: Multilingual Matters.
- Kuno, S. (1973) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, MA: The MIT Press
- Kuno, S. (1975) Three perspectives in the functional approach to syntax. *Papers from the Parasession on Functionalism*, 276-336. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Kitagawa, C. (1983) On the two forms of negative gerund in Japanese. *Papers in Linguistics* 16, 89-126.
- Lobov, W. (1972) The transformation of experience in narrative syntax. In Lobov (ed). *Language in a Inner City*. (pp. 354-396) Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
- Maynard, D. (1980) Placement of topic changes in conversation, *Semiotica* 30 (3/4), 263-290.
- McGloin, N. H. (1972) *Some Aspects of Negation in Japanese*. Ph.D. Dissertation. University of Michigan.
- McGloin, N. H. (1986) *Negation in Japanese*. Edmonton: Boreal Scholarly Publishers.
- Miura, A and N. H. McGloin (2003) *An Integrated Approach to Intermediate Japanese*. The

Japan Times.

Sadler, M. (2006) A blurring of categorization: the Japanese connective *de* in spontaneous conversation. *Discourse Studies* 8(2), 303-323.

Schefloff, E. A.(1982) Discourse as an interactional achievement: some uses of “uh huh” and other things that come between sentences. In D. Tannen (ed.), *Georgetown University on Language and Linguistics* (pp. 71-93). Washington, DC: Georgetown University Press.

Yamada, M. (2002) The Pragmatics of Negation in Narrative: Storyline and Interactional Functions. *Sophia Linguistica* 49, 65-98.

北川千里 (1976) 「「なくて」と「ないで」」『日本語教育』第 29 号 pp. 57-67.

土岐哲・関正昭・平高史也・新内康子・鶴尾能子 (2008) 『日本語中級 J301 - 基礎から中級へ-』スリーエーネットワーク

坂野永理・大野裕・坂根庸子・品川恭子 (2008) 『初級日本語 げんき I, II』The Japan Times.

[makis@kansai-gaidai.ac.jp](mailto:makis@kansai-gaidai.ac.jp)